

Title	「逃げたいのに逃げられない」現実と、どう向き合うか(分科会 4 原発と震災)
Author(s)	川上, 直哉
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 106-109
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5306
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「逃げたいのに逃げられない」現実と、どう向き合うか

川上直哉

本シンポジウムの中で、東京電力福島第一原子力発電所による放射能被害の中、退避できないで被曝している人々の問題を、あるいは、被曝させられている子供たちの問題を、どう捉えたらよいかが議論になった。筆者はこの問題に、いくつかの形で応答してきた。⁽¹⁾ その中で、一つの前提をおさえる必要を学んだ。それは、「誰が」この問題に取り組んでいるか、ということである。

主観的な立ち位置は、この際に、あまり問題とはならない。そうではなくて、どのような立場から、この問題に取り組むのが問われる。神ならぬ我々である。万能の、あるいは中立の、立場を有することはあり得ない。その点を曖昧にすると、誰かが傷つく。いや、どんな言説も誰かを傷つけずにはおれないのかもしれない。それでも、「誰かを傷つけてでも、しなければならぬ」という覚悟や矜持は、自分の限界性の自覚の中からのみ、生まれてくると思う。その最終的な評価は神に預けることを、すべての前提にした上で、だけでも。

筆者は宗教者として、この問題に取り組む。そう自己限定する時、この問題への自分なりの答えが出てくると思っている。「宗教者として」とはどういうことか。それは「信仰に基づき祝意をもつて調和をもたらず」ということを意味している。

災害の中で、人は動揺する。それは放射能災害に限らない。その動揺の中で、信仰に基づき、つまり無根拠に、「大丈夫だ」と言う。そういう人がいてくれないと、現場は混乱してしまう。私たちは、二〇一一年の大震災の現場において、無根拠に「大丈夫だ」という役割が宗教者の得意分野として存在していることを知った。

動揺が収まった後、人は原因を捜し、怒りや落胆に近づく。いわゆる「神義論」の問題も、こうして起こってくる。その時、宗教者の役割の二つ目が見えてくる。つまり、人と世界とを祝福すること。存在を肯定し、過去を赦し、未来を明るくものとして望見すること。そうしたことを行う。それは「前向き」ということは少し違う。私たちは、どの方向が「前」であるかを知らない。ただ、祝福する。それは、時間の流れ（クロノス）の中の水平次元ではなく、超越からの切断（カイロス）の事柄として、垂直の断層によつて空気に流される人を救い出す所作である。おそらく、傾聴という事柄は、このことのためにこそ、まず求められるように思う。

動揺を治め、祝福をしてから、宗教者は、現場に調和をもたらす。言い換えれば、和解の務めに励む。それが、宗教者だと思ふ。さてそこで、どんな信仰が、どんな祝福を語ったのが、この調和の中に査定されることに注意を向きたい。たとえば、自民族の優位性を愚かしく信じ込み、敵への呪いの裏面に過ぎない祝福を語る者もあると思う。しかし、そこに生まれる調和は、多くを切り捨てたものとなるだろう。逆に、弱く小さくされた声なき呻吟から発する調和を世界に生み出せるなら、それはきつと、信ずるに値する何かに基づき、包括的な祝福（それが本物、ということだろう！）を語るものであった、ということになるだろう。

原発事故による汚染現場（それは福島県内に限るものではない）の惨禍は、「逃げたくても逃げられない」という一言に凝集される。それはおそらく、これから事態の深刻さを知らされるだろう宮城県・岩手県南部・栃木県・茨城県・千葉県北部そして東京都都心部に、拡散する惨禍であると予想される。この問題への備えを、急がなければならぬ。

人命が、そこにかかっている。それでも、その動揺の中で、私たちは「大丈夫だ」と言えるか。大きな価値が毀損されているように思われる。それでも「大丈夫」と言える信仰とは、どんなものだろう。

ここでキリスト教会の歴史は参照に値する。

かつてドナティスト論争が起こった時、「信仰」の保持をめぐつて譲れない線を引いた人々に対して、その線を超える神の愛が語られた。⁽²⁾ そのアウグスティヌスに多くを学んだはずの宗教改革が宗教戦争に至り、そこから来る嫌気が生み出した啓蒙主義が寛容を説いた後、たとえば一九世紀の米国北部で、奴隸制を非キリスト教的としつつも奴隸を所有するキリスト者を排斥することへの厳しい異議申し立てが展開し、⁽³⁾ あるいは、無残に戦死して逝く人々に告解の秘跡を行わせるべく、ナチ親衛隊員に司祭としての按手を行った二〇世紀のカトリック教会があった。⁽⁴⁾

世界は、一つの「究極の価値」らしきもので善悪を二分することができるほど、単純にはできていない。あるいは、私たちは、世界に起こる事象を「善悪」で二分できるほど、はつきりと「究極の価値」を手に入れることなどできない。あるいは、そうした「価値」を、手に入れたと思ひ込んではいけない。それが、教会の歴史が語るところであろう。

かつてK・バルトが見事に描写したように、創世記に示されるエデンの風景は、示唆に富んでいる。園から発する川の先に、金銀財宝文明がある。それらを追いかけると、神が用意した「人のいるべき場所」であるエデンから遠ざかる。園の内側の情景は簡潔で、その中央に生と死を示す木だけが描写されているのみである。生と死に集中すること。「生と死」以外のすべては、実は「余計」であるかもしれない、ということ。そして、その「死」の木の名前は、「善悪を知る」とされていること。

エデンに住まわず、エデンを憶れるばかりの私たちは、肅然として現下の状況をエデンに引き比べて考える。自分はいつたい何者であるか。「逃げたくても逃げられない」という人々は、今、「生と死」の問題にギリギリと向き合わせら

れている。多くの人は、その緊張に耐えられず、「それならば、せめて幸せに」と、金銀財宝文明のほうへと、つまり、人間が本来いるべき場所から遠くへと、目をそらし、出て行ってしまった。⁽⁶⁾無理もないことだ。しかし、出て行けない人々もいる。さらに、危険も知らされずに汚染地帯に生活している子供たちは、「目をそらす」という選択すら、させてもらえていない。そのことに心痛める親がいる。その親たちは、おそらく、現代のエデンにいるのかもしれない。考へるべき本質に向き合う人々。私たちは、彼女・彼らに学ばねばならない。その判断を評価するのではない。私たちはそこに学び、そして、自分の限界の中で、せめてもの支援を行って、その結果を神に委ねる。それが、この問題において我々が執るべき態度だと思う。

注

- (1) たとえば、拙稿「無力の力、祈りの力」『信徒の友』二〇一四年五月号、三〇頁以下、あるいは、二〇一四年七月に行ったタヒチでの説教、等。
- (2) 『ドナティスト駁論集』アウグスティヌス著作集第8巻、教文館、一九八四年。
- (3) 西岡みなみ「一九世紀前半のアメリカ合衆国における北部聖職者奴隸制理解」日本基督教学会第六二回学術大会、二〇一四年九月九日、関西学院大学。
- (4) グレオン・ゴルドマン『翼の影』工藤京子訳、コルベ出版社、一九七五年。
- (5) カール・バルト『教会教義学 創造論Ⅰ／Ⅰ』吉永正義訳、新教出版社、一九八四年。
- (6) 試みに、インターネットでHappy Fukushimaと検索されたし。